

◆『戦史秘話』第七話◆

## 知られざる日本・フィンランド軍事関係史

### －75年ぶりの武官着任－

#### 75年ぶりの着任

去る10月15日、駐日フィンランド大使館付国防武官のキンモ・トマス・タルヴァイネン（Kimmo Tuomas Tarvainen）陸軍大佐が、着任挨拶（8月に着任）のための防衛研究所を訪問した。何と、専任の武官としては、第二次世界大戦の終結以来75年ぶりであった。



懇談では、安全保障や地域情勢のほか、大佐の方から、日露戦争期の東郷平八郎海軍大將（のち元帥）から第二次世界大戦中における大佐の「前任者」の日本での活躍、暗号解読をめぐる軍事協力などについて言及がなされた。

ちなみに、2009年、当時のヨルマ・ユリー（Jorma Julin）駐日フィンランド大使は、外交関係樹立90年に際して、日本がフィンランドを国家として正式に承認したアジアで最初の国であるとしたうえで、両国関係における4つの記憶すべき出来事を挙げた。

第一に日本海海戦で日本がロシアを破ったこと、第二にオーランド諸島問題（後述）の解決、第三にフィンランドの独立運動に対する財政的支援、最後に第二次世界大戦直前における軍事訓練での協力である（ヨルマ・ユリー「日本とフィンランドの協力関係－外交関係樹立90周年をむかえて－」『日本フィンランド協会ニュース』第92号、2009年7月）。

何と4つのうち、3つが軍事関係であった。このように、日本とフィンランドの両国関係において、軍事的協力関係は大きな位置を占めていたのである。そこで本稿では、戦前の両

国の軍事関係について、防衛研究所所蔵の史料も交えつつ概観したい。

### 日本を訪問した最初のフィンランド人ーラクスマンー

日本を最初に訪問したフィンランド人は、フィンランド系ロシア人のアダム・ラクスマン (Adam Erikovich Laksman) である。ラクスマンと言うと、多くの日本人はロシア人ではないかと思われるかも知れないが、実はフィンランド系ロシア人で、ロシア帝国の陸軍中尉 (オホーツク海沿岸のキジンスクの守備隊長) であった。彼は、1792年10月、日本人漂流民の送還と通商開始を目的とするロシアの使節として根室に来訪したのである。日本を訪問した最初のフィンランド人が軍人であったということは、その後の両国の関係を予感させるものであった。

1879年9月には、フィンランド出身の探検家アドルフ・エルク・ノルデンショルド (Adolf Erik Nodenskiöld) が、北極海航路開拓の帰途、日本に立ち寄っている。約2か月間滞在し、明治天皇にも謁見している。さらに1900年には、フィンランド人宣教師が日本に派遣され、フィンランド福音ルーテル教会の布教活動が行われたのである。

### 日露戦争と二人のフィンランド人

1904年に日露戦争が勃発するが、日露戦争に際して、日本とロシア各々の側にたって活躍した対照的なフィンランド人がいた。ひとり、コンニ・シリヤクス (Kunni Zilliacus) である。駐スウェーデン臨時日本公使館の陸軍武官となった明石元二郎大佐が行った対露謀略活動は、「明石工作」としてよく知られている。その有力な協力者の一人が、シリヤクスで、フィンランド亡命独立運家として、ストックホルムを中心として反ロシア地下運動を展開しており、日本から多額の資金援助も受けていたのである。ちなみに、シリヤクスは、1893年から2年半、日清戦争当時の日本に滞在し、『桃太郎』をスウェーデン語に翻訳するとともに、1896年『日本研究と素描』を出版するなど、日本通でもあった (稲葉千晴『明石工作ー謀略の日露戦争ー』丸善ライブラリー、1995年)。

他方、ロシア側には、フィンランド独立後に大統領、元帥となったカール・グスタフ・マンネルヘイム (Carl Gustaf Emil Mannerheim) がいた。マンネルヘイムは、日露戦争に従軍を志願して、奉天会戦に参加し、日本軍兵士の団結と犠牲的精神に感銘を受けたと言われている。さらにマンネルヘイムは、1908年10月、アジア大陸横断騎行の途次、8日間日本に滞在 (長崎→舞鶴) している。

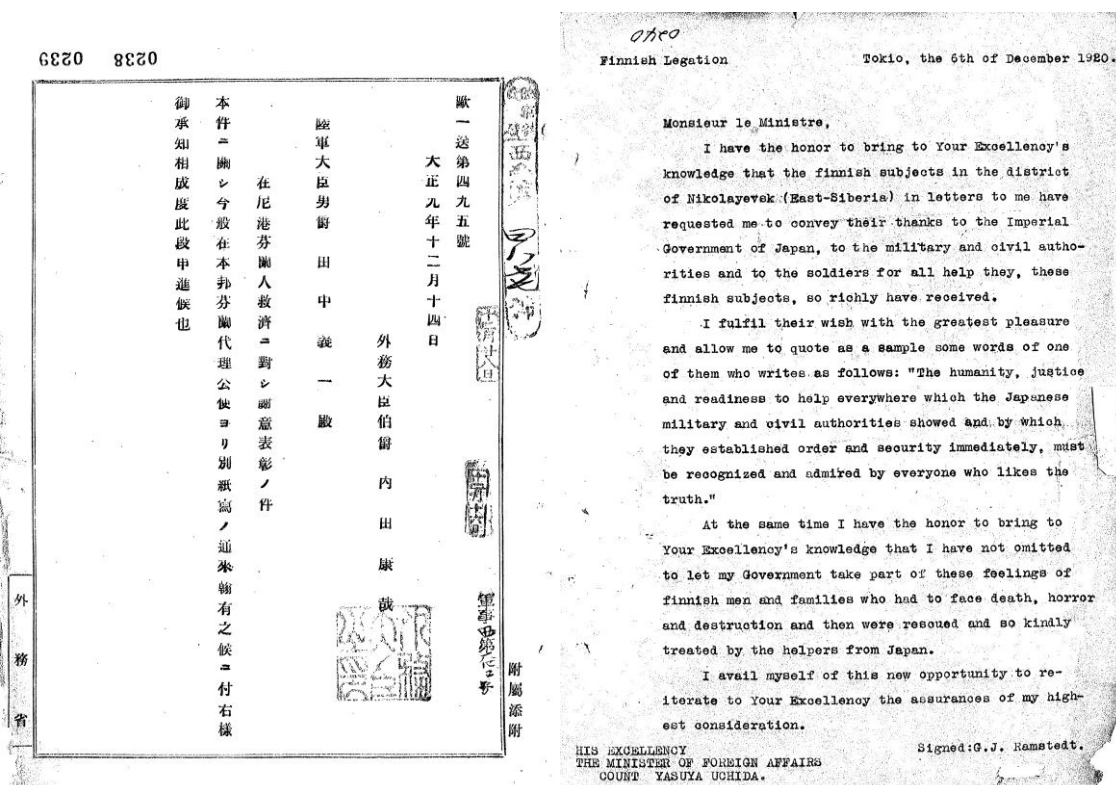
### フィンランド独立、日本との国交樹立へ

第一次世界大戦末期の1917年12月 フィンランドは、ロシア (ソヴィエト政権) からの独立を宣言する。大戦終了後の1919年5月、日本はフィンランドを国家承認、同年9月、

グスターフ・ラムステッド (Gustaf Ramstedt、ヘルシンキ大学教授) が初代公使に任命され、日本はフィンランドが常駐使節を派遣したアジアで最初の国となった。

国交樹立して間もない両国であったが、信頼を醸成する機会があった。ひとつは、シベリアに取り残されたフィンランド人を日本軍が救出して、フィンランドから感謝されたことである。

以下に示す史料は、「在尼港芬蘭人救済に対し謝意表彰の件」である。



\* 「西受大日記 (大正 10 年 1 月)」(陸軍省—西受大日記—T10-1-48、レファレンスコード: C07061144500)

本文書には、ニコラエフスク (尼港) におけるフィンランド人救出に対する内田康哉外相宛てのラムステッド公使の礼状 (1920 年 12 月 6 日付) が添付されている。当時、同地方は、日本人捕虜やロシア人反革命派がパルチザンによって全員殺害されるという惨劇「ニコラエフスク事件」(1920 年 3 月～5 月) が生起しており、治安状況は悪化していた。

礼状には、「日本文武官憲ハ至ル處救済ニ際シ正義人道ヲ標榜シ且用意周到ニシテ速ヤカニ社会ノ安寧秩序ヲ確立セシコトハ真理ヲ尚フモノハ何人モ之ヲ認メ且賞揚セラルヘカラスト存候」(訳文) との救出されたフィンランド人の感想が引用されていた。

シベリア出兵に際して、多くのポーランド人孤児が日本軍によって救出されたことは有名であるが、フィンランド人の救出はほとんど知られていない。

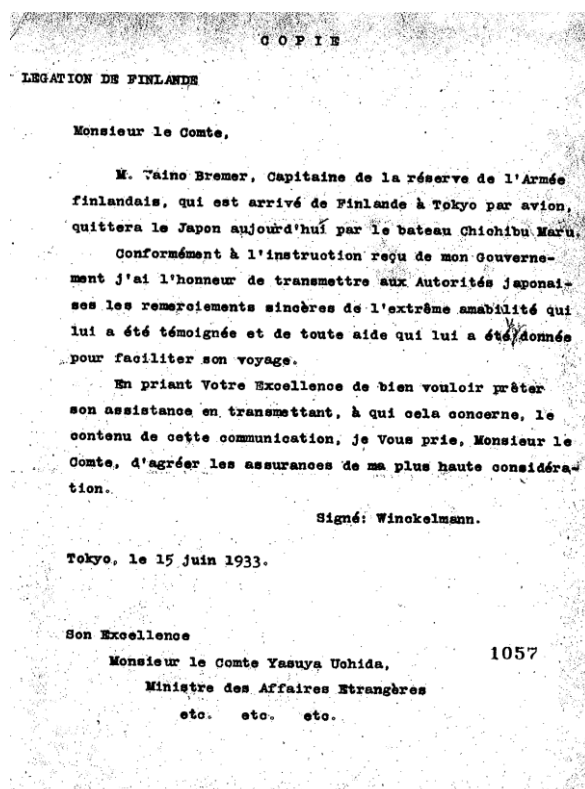
そして、もうひとつ信頼促進の機会となったのが、国際連盟による領土問題処理であった。

1921年6月、国際連盟理事会は、新渡戸稲造国際連盟事務次長のもと、フィンランドとスウェーデンの間で領有権をめぐる係争中であったオーランド諸島に関する裁定を承認した。それは、主権はフィンランドとするが、広範な自治を認め、言語や文化風習はスウェーデン式にするというものであった。日本代表の石井菊次郎元外相も、同裁定に積極的支持を表明していた。「新渡戸裁定」とも称される同裁定は、領有権問題の平和的解決のモデルとされており、新渡戸の名前はフィンランド人にも記憶されていると言われている（玉城英彦『新渡戸稲造 日本初の国際連盟職員』彩流社、2018年）。

### ブレマー大尉の飛来—1930年代における両国の接近—

1930年代に入り、両国は急速に接近していった。それを象徴しているのが、世界一周の途次日本を訪問したフィンランド空軍のブレマー大尉（Tokiossa Bremer）に対する歓迎ぶりである。ブレマー大尉は、1933年6月9日、ユンカース A80 で飛来、南弘通信大臣を表敬訪問している。

以下は、「芬蘭飛行士『ブレマー』氏歓迎に対し芬蘭側より謝意表示の件」及び「『ブレマー』大尉ノ訪日飛行ニ関スル件」と題した史料である。



\* 「海軍省公文備考 昭和8年 D 外事 卷4-2」（海軍省—公文備考—S8-80-4520、  
レファレンスコード：C05022745100及びC05022745200）

ゲオルグ・ヴィンケルマン（George Winckelmann）公使の歓迎に対する礼状と、歓迎の

模様を報じたフィンランドの新聞記事も添付されている。写真には、大尉のほか、ヴィンケルマン公使、西尾忠方貴族院議員などが写っている。

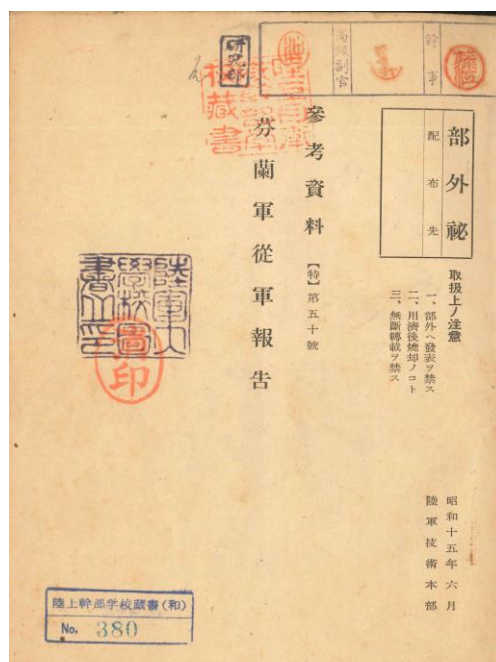
その後、同年ヴィンケルマンの後任となったフーゴ・ヴァルヴァンネ (Hugo Valvanne) は、公使から大使へと肩書が格上げされた。一方、1936年11月、日独防共協定の締結を受けて、酒匂秀一が、初の専属の在フィンランド日本公使として任命されるにいたる。

さらに、のちに駐リトアニア領事館領事代理として、ユダヤ人をホロコーストから救い「命のビザ」として有名になった杉原千畝が、1937年9月～39年7月にかけて、駐フィンランド公使館二等通訳官として対ソ情報活動に従事していた。

### ソ連との戦争をいかに戦うか？

1939年9月、第二次世界大戦が勃発、11月30日にはソ連軍がフィンランドを攻撃し、ここに「冬戦争」が始まった。1938年の張鼓峰事件、1939年のノモンハン事件とソ連との武力衝突が続いていた日本軍は、同戦争に多大な関心を寄せており、1940年1月には、新見清一陸軍砲兵少佐らを現地に派遣、フィンランド軍を視察している。

以下は、その報告書である。



\* 「参考資料 芬蘭軍従軍報告 (部外秘)」陸軍技術本部、1940年6月 (防衛研究所所蔵 図書：091-大-146)

本報告では、フィンランド軍がソ連軍に対して善戦した要因として、精神的な団結心、勇敢さのほか、スキー使用及び錯雑地形の行動への習熟、寒地への慣れ、個人の教養の高さを指摘したうえで、冬季戦闘における軍事技術及び用兵関係に関する事項がまとめられている。用兵面における日本軍に対する教訓としては、以下の通り記されていた。

「一 冬季戦には常に冬季の行動に慣れし軍隊を充当するを以て第一義となす。二 スキーの軍用普及に就ては更に一段の努力を要す。三 寒地 積雪地に於ける軍隊の行動を軽妙ならしむる為技術的方面と連繋し、必要なる研究並に整備を要す」

さらに、1940年には、アウノ・カイラ (Auno Kaila) 大佐及びラウリ・ライネ (Lauri Laine) 大尉 (のち少佐) が日本に招かれ、日本軍に「冬戦争」に関する情報を提供した。

「冬戦争」において、カイラ大佐は師団司令官として、ライネ大尉は砲兵中隊長として、実戦を体験していたのである。例えば、1941年6月、カイラ大佐は関東軍の要請により、「冬戦争」の経験を踏まえて冬季における対ソ戦の戦訓について講演を行っている。

その後、カイラ大佐、ライネ大尉は、1941年9月に各々フィンランド公使館の駐在武官、輔佐官に就いている。ちなみに、前年1940年7月、フィンランドは満州国を承認し、世界で11番目の承認国となった。

## 暗号解読の世界にまで及んだ両国の協力

対ソ戦の教訓のみならず、第二次世界大戦中に、日本とフィンランドの間では、暗号解読など対ソ情報協力も行われていた (宮杉浩泰「第二次大戦期日本の暗号解読における欧州各国との提携」『Intelligence』第9号、2007年11月)。

日本側の陣容は、在スウェーデン駐在武官の小野寺信大佐 (のち少将)、1940年9月に初の専任の在フィンランド駐在武官となった小野打寛中佐、在フィンランド公使館付武官輔佐官の広瀬栄一中佐などである。

フィンランドとの暗号解読に尽力した広瀬中佐は、フィンランドについて、「非常に国民が団結しておりまして、日本にたいして非常に好感を持ってきているわけです。ですから非常に働きやすいわけです。非常に気持ちのいい国であります」と回顧していた (広瀬栄一「フィンランドにおける通信情報」『同台クラブ講演集』編集委員会編『昭和軍事秘話—同台クラブ講演集— 上巻』同台経済懇話会、1987年)。

フィンランド側の主な関係者は、参謀本部情報部長アラダール・パーソネン (Aladar Paasonen) 大佐、参謀本部諜報課長レイノ・ハッラマー (Reino Henrik Hallamaa) 大佐、パルコ (Yrjo Palko) 少佐、フィンランド軍情報将校のエリック・パレ (Erkki Pale) などである。ちなみに、ハッラマー大佐、パルコ少佐は、功績が認められ、日本から勲四等瑞宝章が授与されている。一方、広瀬中佐も、1941年にフィンランドより勲章を受章している。

戦争末期には、日本は、フィンランドのソ連暗号解読資料と解読関連の要員と機材をスウェーデン北部に移送するという「北極星作戦」に資金の提供を行い、暗号解読資料を入手している (稲葉千晴「北極星作戦と日本—第二次大戦中の北欧における枢軸の対ソ協力—」『都市情報学研究』第6号、2001年)。

## おわりに

このように密接な軍事協力関係は、1944年9月フィンランドがソ連と休戦協定を調印したことによる日本との国交断絶の結果、終焉を迎える。カイラ大佐が、本国に帰還したのは、翌1945年春であった。

日本・フィンランド両国は、ユーラシア大陸の東西両端に位置し地理的には離れているが、ロシア・ソ連を挟んで「隣国」の立場にあり、良好な国民感情を背景として、日露戦争から第二次世界大戦にいたるまで密接な軍事関係を維持してきた。

昨年、両国は外交関係樹立100周年を迎え、二国間の関係は多方面で発展しつつある。今回、75年ぶりに専任の武官が東京に着任したことにより、21世紀の変化する新たな安全保障環境のもと、自由、民主主義や人権といった基本的価値観を共有する両国が、過去の「遺産」に基づく特別な信頼関係と相互理解を生かしつつ、安全保障面における協力をさらに発展させることを期待したい。

(研究幹事 庄司潤一郎)